

未完の産業都市京都

あらすじ

1. 概要

この本の中身をひとことでは、京都を例にとった、近世と近代の相克です。そしてそれが現在の京都にどんな光と影を与えているかを考えています。多くの人は、京都が明治維新以来、観光の町、古都としての道を歩んだと思われているかも知れませんが、京都も産業都市としての道を歩んだ時期があります。しかし、その道には多くの障害がありました。その障害の中身を詳しく見るのが前半部の三つの章。後半部の三つの章では、京都の困難に満ちた近代の歩みがもたらした現在の京都の姿を、職、住、観の三つの側面から捉えます。

2. 町衆の変質

近世と近代の相克の中心が、京の町衆、近代以降は自家営業を行う自営業者です。明治維新以降の近代化の歩みの中で、三都を中心とした主要都市では江戸期の町人階級が中心となり、町の近代化と共に変質、解体されてゆきました。その典型が大阪です。大店の商人はやがて没落、あるいは産業資本家に変身することで、近世的商人から脱皮を遂げました。同時に、町は自営業者の住居兼店舗から次第に機能純化を遂げて、高度化し、家族は郊外に、住み込み奉公人は、通勤の従業員として中心部を離れたのです。京都ではこの自営業者の解体・変質過程は遅滞し、町並みは高度成長期まで近世以来の姿を残しました。

3. 地域社会

京都の都心部は菱形をした小さな町でびっしり埋め尽くされています。通りの両側に並ぶ家々をまとめた両側町が町の単位となり、多くの町が集まり番組を形成しました。町一番組が地域社会の骨格となり、番組小学校はその地域の中心となりました。学校運営、財政、教員採用の全てが番組単位で営まれました。地域社会の結びつきは強く、この自治権は市制発足後も番組に残りました。市会議員も番組代表の側面が強かったのです。大正・昭和の二次にわたる市域拡張は、番組中心の地域社会の在り方を大きく変える転機になり得るものでしたが、都心部ではその骨格は残りました。

4. 外部からの近代化

近世以来の主産業であった西陣とその商流を支えた室町は、一定の近代化を遂げますが、複雑な分業体制自体は大きく変わることなく存続しました。優良顧客を持つネットワーク

と高い技術水準に支えられた高級品中心という方向に変化はありませんでした。近代化・産業化は地理的にも社会的にも京都の中心から外れた外部から起こりました。昭和に入ると南西回廊は京都市に編入され、絹織物以外の綿紡績や化学、機械などの工場立地が集中しました。人口流入はこの南西回廊に集中し、都心部とは異質な住商工混在地域が形成されました。

5. 現代の京都市の姿

1990年代にそれまで京都の産業の中心を形成していた西陣が退場して、京都の製造業は南西回廊に集中することとなった。都心部では自営業者が激減して、小売業と観光関連の料飲店や宿泊施設が中心の町並みになった。特にインバウンドブーム以降は、市内の住宅地にも簡易宿所や民泊、更には小学校跡地や建物を利用したホテルの新設も相次いだ。今世紀に入る頃には、市内最大の住宅地であった洛西ニュータウンへの東西線延伸が事実上断念されて、ニュータウンの人口減少が激しくなった。阪神間から北東方向へ向かう交通網は南西回廊に集中し、名神、第二京阪、京滋バイパス、京奈和、京都縦貫などの道路網が形成された。京都はJR京都駅を境に南北で全く異なる景観を持つ都市になった。

6. ゆりかご都市

京都は地域市場の規模が小さく、阪神間との距離が50 km程度であるうえ、事業所立地には課題が多い。都心集積の小ささ、都心部の交通インフラの未発達、景観規制による土地供給の制約など。他方、主要大学の集中立地、南西回廊の電気・機械の優良企業、京都市による事業創生への支援、KRP（京都リサーチパーク）など、他都市には見られない魅力も持つ。また、明治維新以来、京都は多くの企業を生み出し、それらが京都を巣立ってきた実績も見逃せない。これらが、スタートアップ企業の立地にどのような影響を与えているかを第5章付論で論じている（別添付論参照）、

7. 郊外の形成

都心集積の未発達、南西回廊の形成、更には市を囲む東山、北山、西山が山裾まで風致地区に指定されたことで、郊外都市の形成は抑圧され、郊外に住み都心に通勤するという生活スタイルは京都にはなじみませんでした。大阪から見た阪神間のような地域は京都には形成されなかったのです。革新府政の影響もあって高度成長期以降の公共交通や高速道路網の発達も京都の都心部を素通りし、小売商業を中心とする都市間競争でも京都は次第に競争力を失いました。バブル崩壊により、西陣と室町は回復不可能なまでに劣化し、廃業と土地処分が相次ぎ、90年代後半から2000年代にかけては都心にマンションブームが起こり、自営業中心の都心の姿は大きく変貌し、都心の人口は回復する一方、都心機能の劣化は更に進むことになりました。

8. 観光業の成長と景観規制の影響

観光都市としての京都の優位は、観光関連業種の成長と立地を促進しました。観光客、特に宿泊観光客の急増は料飲店の立地と競争を促進して、メニューや調理方法のイノベーションを加速したと考えられます。京都の和食の評価は上昇、それまで主たる顧客層を形成していなかった観光客が、和食のディナーを提供する料理店にも一大需要層を形成しました。食べログや一休といったネットのグルメサイトは、これまで夕食時には帰宅の途についていた観光客を市内に留めることに貢献したと思われます。

他方、観光業の急成長は、厳しい景観規制と相俟って他部門への土地供給を抑圧し、都心部には巨大な潜在的キャピタルゲインを孕む地域が組織的な再開発がなされないまま残りました。バブル崩壊後の都心のマンションブームは、景観規制の更なる強化をもたらし、特にオフィスビルの供給は特に大きな負の影響を受けました。2010年代以降建設されたホテルの延べ床面積は、市内の賃貸オフィスビルの総量を上回る規模となったと推定されます。

9. 結論

コロナ禍がもたらした永続的な影響

政策提言